

5 提出課題やパフォーマンスから見取る

ねらい（観点）をもって見取ること

評価の方法の一つとして、提出課題や作品から学習状況を見取ることがあります。

提出課題から見取る際に大切なことは、目的を明確にしておくことです。生徒にどのような力が身に付くのかを考え、評価規準を設定した上で課題を出しましょう。またその評価規準を、生徒と教員が共有することが非常に重要です。

どのように生徒に返すかを考える

提出された課題はそのままにしておいてはいけません。きちんと評価し、生徒にその結果を分かりやすく伝えます。そして、どうしてその評価になったのかについて理由を伝え、次へつなげます。

そのために、生徒自身が今後の取組に向けて何を改善すればよいのか、すべきことのポイントを絞って理解できるように返すことが大切です。

「ルーブリック」を使用して評価する

作品や実技試験など、生徒のパフォーマンスを評価するときは、生徒の次の学びにつなげるための工夫をすることが大切です。評価規準に基づいた評価の視点を整理し、チェックすべき要素を具体的にレベル別に定めておくものが「ルーブリック」です。作品などのパフォーマンスをトータルで評価するのは難しいので、「ルーブリック」を使用して目標とするべき視点別に評価を行うことは、教員と生徒双方にメリットがあります。

☆パフォーマンス評価

設定した評価規準の実現状況を測るため、生徒に課題を与え、その内容の分析をもって評価を行うものを、「パフォーマンス評価」といいます。必ずしも実演や実技のみを評価すると言うことではありません。

☆パフォーマンス課題

生徒に様々な知識やスキルを使いこなす（活用・応用・統合する）ことを求める課題を「パフォーマンス課題」といいます。

課題に取り組んだ結果の、論説文・レポート等の成果物や、スピーチ・プレゼンテーション等の実演（狭義のパフォーマンス）を評価します。

パフォーマンス課題は模範解答が存在しないため、評価をする際にはルーブリックを活用するなど工夫が必要です。

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

課題に取り掛かれないとき

何をしたらよいか分からず課題に取り掛かれない生徒には、作成のヒントや材料、仕上げるための方法やコツを示したり、ワークシート等に褒めるコメントを入れたりすることが大切です。

期限を守るためには

期限までに提出できない生徒については、課題の内容は理解しているか、どこまでできているか、提出の方法・締切は分かっているかを途中で確認をしていくなどの支援があると期限を守って提出しやすくなります。



スピーキング（スピーチ）評価のための「ルーブリック」の例

「○○について英語で話し、内容に関する質問に答える」

	話し方	質疑応答
A（5点）	聞き手が十分理解できる速度・声量で話し、理解を促す／確認する工夫をしている。	質問を理解し、文の形で応答ができる。
B（3点）	聞き手が十分理解できる速度・声量で話している。	質問を理解し、簡単な応答ができる。
C（1点）	聞き手が十分理解できる速度・声量で話していない。	質問が理解できない、または応答できない。
備考	「理解を促す／確認する工夫」は、強調や自然なジェスチャー／アイコンタクトなどとする。	「簡単な応答」は単語、フレーズレベルのものとする。

ルーブリック評価の良い点

- 生徒側：何をどのように努力すべきか理解しやすい。
 - ・事前に観点や基準を知らせておく。
 - ・事後には診断的効果がある。
- 教員側：何をどのように指導すべきか計画しやすい。
 - ・評価の観点＝授業での指導項目（目標との結びつきを意識する）。

ルーブリック評価の留意点

- ・作成に時間がかかる。
（作成方法の例：まずは基準（B）を設定し、それを満たさないものを（C）とする。（B）の中で質的・量的に高まりがみられると判断するものを（A）とする。＜3段階評価の場合＞）
- ・複数の教員で使用する場合、段階別基準の共通理解が必要。
（前年度の例など、基準となるものがあると良い）

☆評価（C）の生徒に対する手立て

評価（C）の生徒に対しては、（C）のままにしないための手立てが必要です。作品などの場合は、再提出させたものが目標に達するものであれば、評価（B）にするのが良いでしょう。

しかし評価については、一人で判断することなく、同じ科目の担当者同士の共通理解が必要です。評価（C）の生徒に対する手立てについて担当者同士で相談し、決定するようにしましょう。



探究の道しるべ

ルーブリック評価は、適した課題とあまり適さない課題とがあります。そこで、所属校でルーブリックを活用している教員を探し、次の点についてリサーチしましょう。

- ① どのような課題にルーブリックを活用しているか。
- ② ルーブリック評価に向いていない課題はどのようなものか。
- ③ 生徒の学びにルーブリックをどのように生かしているか。

作品の評価

作品の制作（製作）を伴う教科・科目では、ともすると最終的に完成した作品だけで評価しがちです。しかし、作品の制作（製作）の途中でも、作品の状況などから評価できる場面がたくさんあります。ただ、実技を伴う教科・科目では評価対象人数も多く、効率的に途中段階での評価を行わなければいけません。デジタルカメラで途中経過を記録したり、制作のプロセスを明確にした上で、そのプロセス上のポイントを評価したりするなど、工夫して行うとよいでしょう。